

零跑汽車 (Leapmotor)



山本 隆久

1 調査（説明）

- (1) 年月日 令和7年4月16日（水）
- (2) 場 所 零跑汽車芯図プラザ展示センター（本社ビル内）
- (3) 相手方出席者 零跑汽車公共事務マネージャー 劉 尚隆 氏 ほか

2 概 要

零跑汽車（リープモーター）は、中国の浙江省杭州市に本社を置く自動車メーカーであり、電気自動車（EV）の開発、製造及び販売を行っている新興EV企業のひとつで、2015年に設立し2022年には香港証券取引所に上場した成長企業である。

リープモーター社が製造販売する車は、「Lingxin 01」と呼ばれる初の国産人工知能（AI）チップを搭載しディープラーニングと最先端のコンピューティング能力を持ち、電動トラクションモーター、車両CPU、LED照明などの独自のコンポーネントを開発し、他社との差別化を図っている。



説明を受ける調査団一行

EVの燃料電池は従来のリチウムイオンではなく新開発の蓄電池（どんなバ

ッテリーなのかは企業秘密らしい) を車体フレーム下ではなく、アンダーボディ=フレーム上に直接組み込む=車体のフロアがバッテリーセルとなっている「C01」は、世界初の技術とのこと。

エントリーレベルの完全電気自動車C01は、200kW(268馬力、272PS)の最高出力と360N・m(266lb・ft)のピークトルクを発生する単一モーターを搭載し、デュアルモーターバージョンは400kW(536馬力、544PS)の最高出力と720N・m(531lb・ft)のピークトルクを発生する。

価格は260万円から300万円で最新技術の塊りに乗ることができる。

また、EV車の開発技術において最も重要なのは、バッテリーの充・放電時の温度管理で、リープモーター社の温度管理は高性能のICチップにより管理されるとともに異常が起これば自動でセーブモードへ移行し、その状況はサーバーを通じてリープモーターに送られ、対策がフィードバックされるシステムを搭載している。

この車両情報通信システムは、ホンダやトヨタ社のコネクティッド・システムと同等のものと推測されるが、リープモーターでは2019年にシステムを構築してるので、この分野では先駆者的存在といえる。

また、搭載するバッテリーの容量は21.6kwhから90kwhまで車種やグレードにより様々なバリエーションを持っている(同一車種でもグレードによりバッテリー容量が変わる)のも大きな特徴だと感じた。



展示車に試乗する筆者

ちなみにトヨタのEV車「b z 4 x」のバッテリー容量は、71.4kwhで車体価格は550万から600万円。

中国の国産EV車は、航続距離が160km程度のコンパクトEVだと約70万

円の車種があるとのこと。

リープモーターのエントリー車である「T03」は最も小さなAセグメントの小型5ドアで価格は100万円。

しかも100万円のT03には、1回の充電で400キロの走行が可能な上、レベル2の自動運転機能を備え、3台の車外カメラと12個のレーダー（ミリ波レーダー1台と超音波レーダー11台）を搭載している。T03の内装には、8.0インチTF Tインストールメントクラスターと10.1インチタッチスクリーンが搭載されているから、驚きの低価格である。



本社（展示センター）前にて

3 まとめ

EV普及のために中国政府は、43万円の高額な補助を行っているためか、杭州市内を走っている自家用車を見ても、国産車（中国）が7割で、そのうち8割程度がEV又はプラグインEV車だった。

中国の車のナンバープレートは、EV・ハイブリッドなどエコな車は緑色のナンバープレート、通常のカソリンエンジン車は青色のナンバープレートであるため、走っている車両は一目瞭然で判別がつくのもEV普及の促進に役立っている気がした。

EVの普及は充電スタンドの充実と補助金、新世代自動車のマストアイテムであるコネクティッド・システムや自動運転システムは、通信インフラの整備が重要で、ともに、政府が徹底的な音頭を取って推進していく必要があると感じた。

想像するに、新車種や自動車メーカーとして登録する基準や性能などのハードルも低いので、異業種参入も含め多くのEVメーカーが競って市場も活性化

し普及促進をしてきたと思われるが、一方で買い替え促進策や低価格販売戦略の影響で、気軽に買い替えを行いリサイクルの追い付かないE Vが空き地などに大量に放置されている、いわゆる「E Vの墓場現象」も各地で起こっているようである。



本社（展示センター）前にて

杭州国家版本館 (中国国家版本館杭州分館)



松井 優介

1 調査（説明）

- (1) 年月日 令和7年4月17日（木）
- (2) 場 所 杭州国家版本館（中国国家版本館杭州分館）
- (3) 相手方出席者 杭州国家版本館副館長 陳 瑜 氏
杭州国家版本館職員 毛 然 氏 ほか

2 概 要

(1) 国家版本館とは

国家版本館は中国政府が国家文化戦略の一環として設立した大規模な書物・文献保存施設であり、中国国内の重要な書籍や文献、各種印刷物などの収集・保存・研究を目的としている。

この施設は、図書館とは異なり、国家レベルで文化安全を確保し、伝統文化の連続性を守るために設計された、国家戦略的な機関である。

北京、杭州、西安、広州の4つに分かれており、それぞれが地域的な特色を活かしつつ、分担して全国規模の文化資産を保存・管理している。

ここでは最新の保存技術やデジタル技術を導入しており、物理的保存だけでなく、情報の永続的な保存にも力を注いでいる。

国家版本館の設立背景には、近年急速に進行する情報化社会への対応と、グローバル化による文化多様性の危機感がある。過去の歴史において幾度も失われた文化財の教訓を踏まえ、国家主導での体系的な保存が不可欠との認

識が強まった。

(2) 杭州分館の概要

浙江省杭州市臨安区に位置し、広大な敷地と自然豊かな環境を活かして建設された。総面積は80万平方メートルで、建築面積は20万平方メートル以上に達する。

施設設計には「山水の中に本を守る」というコンセプトが採用されており、周囲の自然環境と建築が一体となった景観を形成している。伝統的な中国建築様式と近代的なデザインが融合した外観は、訪れる者に荘厳かつ優美な印象を与える。特に注目すべきは、恒温恒湿管理が徹底された保存エリアである。ここでは古文書や貴重な版本が厳重な環境下で保管され、微細な劣化すら許さない体制が整っている。

また、杭州分館は他拠点と連携しながら、各地に点在する古典籍や重要文献を一元的に管理しており、デジタル技術を駆使したアーカイブ化事業も積極的に推進している。

また、一般市民や研究者向けに開かれた展示・体験エリアでは、歴代の書籍文化、印刷技術の変遷、さらには近未来の情報保存技術に至るまで、幅広いテーマで展示が行われている。



説明を受ける交流団一行

(3) 施設の特徴

当日は、杭州分館の職員の方々に丁寧な案内を受けた。受付ホールに入ると、広々とした空間に凜とした空気が漂っていた。ホール中央には、杭州分館の建設理念や概要を示す大型パネルが設置されており、まずはこれをもとに概要説明を受けた。

施設全体に一貫して感じられたのは、「時間の重み」と「未来志向」の絶妙なバランスである。

建築物はあくまでも重厚でありながら、決して古臭くなく、むしろ新しい生命力を感じさせた。伝統的な中国庭園様式を取り入れた中庭や回廊が随所に配置され、来訪者の心を落ち着かせる効果をもたらしていた。バリア



施設の外観

フリー設計や省エネルギー建材の採用など、現代的な配慮も随所に見受けられた。

また、保存に関して物理的保存と並行して、膨大な版本資料のデジタルアーカイブ化が推進されている。

専用の高精細スキャナーによって、紙質や色合い、質感までも忠実にデータ化し、電子版として保存している。これにより、万一の物理的損傷があっても、情報自体は半永久的に保存される仕組みが整っていた。

デジタル化は単なる保存の手段に留まらず、学術研究支援や一般公開にも活用されている。研究者向けには専用ポータルサイトを通じて高精細データを提供し、一般向けには閲覧用に加工したデータベースを開放してい

た。A I 技術を活用して、版本に記された文字情報の自動解析・テキスト化も進められており、検索性・活用性の飛躍的向上が図られていた。

デジタルアーカイブは「保存」と「活用」の両立を目指す新たな文化政策モデルとなり得ることを、今回の視察で強く実感した。



施設内の様子

3 まとめ

杭州分館の取組は、静岡県をはじめとする日本の地方自治体にも多くの示唆を与えてくれる。

例えば、静岡県内に現存する古文書、寺社蔵の巻物、古地図などは、まだ十分な保存・デジタル化が進んでいるとは言い難い。杭州分館のように、恒温恒湿の保存施設と並行して、デジタルアーカイブ化事業を本格的に推進することが求められるだろう。

また、地方独自の歴史・文化を体系的に収集・保存するためには、国や県だけでなく、市町村単位での協力体制構築が不可欠である。杭州分館が地域文化を国家レベルで束ねているように、日本でも「地域から国家へ」という流れを意識した政策形成が必要であると感じた。

文化財保存における最先端事例の視察であり、地方自治体レベルでの文化政策に応用可能な知見を得ることができた。

静岡県もまた、豊かな文化資産を有する地域であり、古文書、絵巻、伝統工芸品など、多様な文化財が存在している。しかしながら、限られた予算・人員の中でそれらを適切に保存し、次世代に伝えることは容易ではない。特に、デジタル保存技術の導入や、施設の恒常的な管理体制の確立は、喫緊の課題とな

っている。

中国は広大な国土と多様な民族文化を背景に、国家規模でこうした課題に取り組んでいる。その中で国家版本館は、モデルケースとして極めて参考になる存在であった。

最後に、国家版本館杭州分館の視察は、非常に意義深い経験であった。

文化とは、単に過去を懐かしむものではない。未来を形作るための礎であり、社会の持続可能性を支える根幹である。

国境を越えた視点から学び、静岡県というフィールドで実践することが、地方政治家として私に課された使命であると改めて感じた。杭州分館が地域文化を国家レベルで束ねているように、静岡県あるいは日本でも図書館機能や公文書の管理を広域で行う必要性を感じた。

今回の視察での学びを活かし、今後の県政に反映していきたい。



施設前にて

杭州高値通用航空



菅沼 泰久

1 調査（説明）

- (1) 年月日 令和7年4月17日（木）
- (2) 場 所 杭州高値通用航空本社、湘湖ヘリコプター基地、
世茂スマートゲートクラウドターミナル
- (3) 相手方出席者 杭州高値通用航空総経理 丁 煒 氏、他

2 概 要

(1) 視察の目的

本視察は、急速に発展する中国における次世代モビリティ施策の実態、とりわけ都市型航空交通（Urban Air Mobility：UAM）及びヘリコプターによる低空バス運行の取組を現地で確認し、静岡県地域公共交通政策に資する知見を得ることを目的として実施された。視察先は、杭州市でUAMの実用化を先導する杭州高値通用航空とその関連施設である。

(2) 視察先の概要

ア 杭州高値通用航空 本社

本社では、同社の沿革やビジョン、主要事業の説明を受けた。2019年設立の同社は、「低空経済」の国家戦略に基づき、地方政府と連携して都市部におけるヘリポートの整備や航空ルートの構築を進めている。運行機体は、米国 Bell 社製の省エネ型小型ヘリコプター「Bell 505」で、最

大4名までの乗客を乗せ、商業施設や観光地などを直接結ぶ「低空バス」として運用されている。初の定期路線は、リゾート地・湘湖と銭江新城（杭州市中心部）を結ぶ約15kmで、地上交通なら30～45分を要する区間をわずか5分で移動可能とする。現在の運賃は498元（約1万円）であるが、今後は需要の拡大により数分の一に抑えられる見通しである。

イ 湘湖ヘリコプター基地

湘湖ヘリコプター基地は、都市近郊の蕭山区に設置されたヘリポートで、低空バスや観光飛行の拠点となっている。周囲には住宅地もあるが、防音対策や飛行ルート工夫により環境配慮がなされている。需要の高まりに



湘湖ヘリコプター基地にて

より、早割チケットなどの販促策も展開されており、先着順で完売するケースも見られるなど、市場ニーズの高さをうかがわせた。

ウ 世茂スマートゲートクラウドターミナル

視察したもう一つの拠点である「世茂スマートゲートクラウドターミナル」は、杭州市濱江区に位置し、地上61階建ての超高層ビルの屋上に設置された、都市型ヘリポート併設型



世茂スマートゲートクラウドターミナルにて

ターミナルである。屋上でチェックインからセキュリティ、搭乗案内までを完結できるクラウド型航空ターミナルとしては中国初の試みであり、都市インフラとしての先進性とスマート技術の融合が注目される。高層ビルと空中交通が直結する構造は、都市ブランディングや企業誘致にも資する先進的なモデルである。

エ 実地体験：低空バス搭乗

落合団長と筆者は交流団を代表し、湘湖ヘリコプター基地付近に設置された移動式ヘリポートから、世茂スマートゲートクラウドターミナルまでの区間を、実際に杭州高値通用航空の運航するヘリコプターで移動した。搭乗前にはターミナル内で簡潔なブリーフィングが行われ、離陸までの準備はわずか数分で整えられた。

離陸後は湘湖から濱江区の超高層ビル群を目指して飛行し、目的地である世茂スマートゲートクラウドターミナルに着陸した。この区間は地上交通で通常 30 分以上を要し、特に通勤時間帯には渋滞による遅延が頻発するが、空中ルートを活用することで都市間移動の効率性が飛躍的に高まることを実感した。

機内からは杭州市の都市景観が一望でき、西湖や钱塘江、未来科技城など主要なランドマークを空から見下ろ



ヘリコプターの低空バスに乗り込む筆者（右端）

すことができ、観光フライトとしての高いポテンシャルも感じられた。

とりわけ印象的だったのは、都市内における「空の動脈」としての機能性である。交通渋滞を完全に回避できることに加え、将来的には災害時の

緊急輸送、医療搬送、行政支援など、多目的な活用の可能性も大いに期待できる。空中移動という選択肢がより身近になれば、都市の構造そのものに変革をもたらす潜在力を持っていることを、肌で実感する貴重な体験となった。

オ 現地関係者との意見交換

視察中、杭州高値通用航空幹部らとの意見交換も実施された。今後の都市航空政策として、電動垂直離着陸機の社会実装に向けた実証実験の計画や、スマートターミナルの国際展開などについて積極的な意見が交わされた。また、現地関係者からは、都市空間の再構築において空中インフラの重要性が増していること、政策支援と民間企業の連携によって迅速なインフラ整備が実現されていることなどの説明があり、地方都市での政策主導型開発の先進事例として注目すべき点が多かった。



説明を受ける交流団一行

3 まとめ

本視察を通じて得られた最大の成果は、都市型航空交通（UAM）の実現に必要な「インフラ」「制度」「民間主導の技術革新」、そして「政府の積極的関与」が高度に融合している中国の現状を、現地で直接確認できたことである。机上では得られない実装過程のリアリティを体感できたことは非常に有意義であった。

杭州高値通用航空の取組は、単なる航空輸送にとどまらず、都市空間の再編や市民生活の質の向上を視野に入れた社会実装として進められていた。都市

部の交通渋滞、災害時の輸送体制、高齢社会における移動手段確保など、複合的な課題に対し、低空モビリティが有効な解決策となり得ることを、実体験を通じて強く実感した。

また、スマートゲートクラウドターミナルに象徴される無人化・省人化技術の導入は、単なる運営コストの削減にとどまらず、サービスの効率性や利便性の向上にも寄与しており、デジタル技術の社会実装における重要な方向性を示していると感じた。

一方で、UAMの導入に向けては、以下のような課題への対応が求められる。

- ✧ 空域の管制体制及び安全管理基準の整備
- ✧ 地元住民との合意形成を含む騒音・安全への対策
- ✧ 離着陸拠点となるヘリポートの立地に関する規制・法制度の整備
- ✧ サービスの持続可能性を支えるコスト構造と運営モデルの確立

これらに関し、中国では政府主導の規制緩和やインフラ整備が急速に進む一方、日本では制度的ハードルが依然高く、実装の障壁となっているのが現状である。しかし、静岡県においても、災害に強い地域づくり、観光産業の高度化、都市内の回遊性向上といった観点から、UAMの導入を検討する意義は大きいと考える。将来的には、中山間地域との連携や、医療搬送・防災利用といった用途も視野に入れ、国や関係機関と連携した段階的な実証事業の導入が望まれる。

今回の視察は、未来の地域公共交通のあり方を構想する上で、極めて示唆に富む経験であった。得られた知見を基に、今後は県行政や議会における政策検討へと還元していきたい。

南宋徳寿宮遺跡博物館



鈴木 啓嗣

1 調査（説明）

- (1) 年月日 令和7年4月17日（木）
- (2) 場 所 南宋徳寿宮遺跡博物館
- (3) 相手方出席者 南宋徳寿宮遺跡博物館スタッフ 張 忠芝 氏

2 概 要

- (1) 南宋徳寿宮遺跡博物館について

南宋徳寿宮遺跡博物館は、中国東部の浙江省の省都、杭州市に建設された博物館である。2020年12月28日に着工され、約2年の工期を経て2022年11月22日に開館した。

遺跡の上に建造された宋様式の建物は、宋王朝の建築書や絵画、考古学的発見の調査に基づき推定した、当時の建築技法や外観、規模に従い、1162年建立の南宋徳寿宮を再現したもので、遺跡本体及び出土品



説明を受ける交流団一行

の保護、研究、収集、展示などの機能を持った建築物となっている。また、その下部にあるメインホールには主殿の遺構が展示されている。

(2) 宮殿の規模と構造について

これまでの調査によると、当時、宮殿敷地全体の面積は約 11 万平米であったが、現在は約 2 万平米のみが管理されている状態である。また、建物は 3 回にわたり改築され、徐々に規模を拡大していったことが明らかになっている。

そして、皇族の居住区画には厚さ約 80cm の煉瓦壁が使用され、豪華絢爛なつくりとなっているが、宮殿職員の区画は安価な素材で構築されており、構造物からもしっかりとした階級差が見てとれる。



博物館内の様子

(3) 水利及び排水について

宮殿敷地内の水路には、自然河川から水を引き込む構造となっているが、複数の水門や湾曲が整備され、河川から落ち葉や流木、泥土の流入を防ぐ工夫が施されていた。

また、敷地内からは多数の井戸も発見されており、豊富な生活用水を確保していたことが分かる。そして、宮殿敷地内には自然勾配を利用した生活排水用の下水路も整備されており、生活排水はその下水路を経て敷地外に排水されていた。

さらに、これまでの調査によると、敷地内の最も低い区画にはトイレが設置されていたものと推測されている。

(4) デジタル技術を用いた復元、展示について

3Dインタラクティブ装置、デジタルプロジェクション、AR(拡張現実)、VR(仮想現実)などを通じて南宋時代の建築と庭園の美しさを忠実に再現し、大規模に復元、展示されており、遺跡とデジタル手法の融合、そして遺跡情報の没入的でインタラクティブな説明や展示を通じ、南宋王朝の建築と庭園の美しさを体感できた。

(5) 遺跡保護・調査について

宮殿敷地全体約11万平米のうち約2万平米のみが管理されており、残りは地中に埋まっている状態である。

現在、地中に埋まっている遺跡の上部は大部分がマンションや企業など様々な建築物で覆われ、人々の生活の場となっている。そのため、調査範囲の拡大及び博物館の規模拡張は今のところ予定されていないとのことであった。

遺跡周辺は40年以上前から大規模開発が進んでいるが、地中の遺跡が発見されることなく、上部には多くの建築物が建てられてきた。その要因としては、当該地域は大規模地震が想定されておらず、地中深くまで基礎工事を施す必要がないため、地中の遺跡が発見されることなく開発が進んでしまったのではないかとの見解であった。

ただ、法的には遺跡等が発見された場合、工事を中断し調査を行うことが定められており、遺跡等の保護・調査は義務付けられている。

(6) 観光・地域振興との連携

海外へのプロモーション活動に留まらず、「より身近な形で文化財を再生していきたい」と博物館の責任者が語るように、ライティングイベントや作品展、杭州市にある15の文化博物館が共同で行うイベント開催など、観光客だけでなく、地域の方々が集い楽しめる場所づくりにも取り組んでいる。

3 まとめ

今回の視察調査を通じ、今から 860 年以上前である 1162 年に建立された宮殿が高度な技術に基づいて建設されていたことが実感できた。博物館担当者の説明にあった水路や下水のシステム、建築様式の違いから読み取れる階級制度は、当時の社会構造や生活様式を今に伝える非常に貴重な手がかりである。特に、水の利用と管理に対する知恵には深い感銘を受けた。自然の地形と水流を活かしたインフラ整備は、現代の上下水道等の都市設計にも通じる先見性が感じられた。

また、宮殿が 3 度にわたり再建され、段階的に拡張されていった事実は、当時の政治的・経済的背景、あるいは災害・戦乱などの影響も含めて検証すべき重要な視点だと感じた。

今回の視察は、文化財保護と地域振興、そして将来的な観光資源としての活用を考えるうえでも大変有意義であった。今後も調査・保存活動が継続されることを期待するとともに、静岡県としても地域遺構と観光・地域振興の連携に積極的な取組を展開するべきと考える。

現在、静岡県には約 900 の国指定及び県指定の文化財があり、これらは、わが国の長い歴史のなかで生まれ、今日まで伝えられてきた貴重な国民的財産である。その一つ一つを次世代へ伝えるため大切に保全することと、それらを活用し観光・地域振興に繋げることの両立が重要である。



博物館前にて

中医薬文化デジタル健康生活館



牧野 正史

1 調査（説明）

- (1) 年月日 令和7年4月18日（金）
- (2) 場 所 中医薬文化デジタル健康生活館（杭州市中医院国医館内）
- (3) 相手方出席者 杭州市中医院人力资源部副主任 鐘 趙蕾 氏 ほか

2 概 要

- (1) A I ロボットによる健康診断

おそらく中医薬文化デジタル健康生活館の一番の目玉となるのがA I ロボットによる健康診断である。

私も受診してみたところ、方法はとても簡単で、ロボットの前の椅子に座り、ロボットに両手を掛け（おそらく脈等がとられている）ロボットの顔となっている画面を見つめ、その後指示に従い、舌を出すだけである。

1分程で登録したスマホに（WeChat：中国のLINEのようなもの）診断結果が表示される。私はもともと、血圧、血糖値、脂質関係が血液検査を行うとあまりよろしくない数値が出るが、まさにその項目の評価が低いことにびっくり！

それだけではなく、なんと性格や生活スタイルまである程度、分析して結果が出ることには驚きであった。私は実はとても「短気」である。しかし家族以外の方は知らない。今回、同行した同僚議員も私のことを「短気」だと

は思っていなかった。それをA I ロボットが何をどう判断して診断したのか摩訶不思議だが、非常に優秀なロボットだと思った。

私以外では西原明美議員が受診した。今回、この報告書作成の一助にとご自身の診断結果を全て送ってくれた。西原さん、ありがとうございます。個人情報なので詳細は書けないが、やはり性格や生活スタイルの部分が意外で、私が描いている西原議員のイメージとは真逆の診



施設を体験する筆者

断結果が出ている。しかし、ご本人は案外、的を射ているようで、本当に不思議だが中国医学の奥の深さを垣間見た気がする。

このロボット、さらにバージョンアップし、出来ることを増やしていくそうである。精彩的！

(2) クイズ形式で中医薬を学ぶ

中医薬を構成する薬草の名前や効能などを学べるほか、薬を布袋に入れて持ち歩くことも推奨している。

これは、秦の始皇帝時代からの習わしで、香水としての機能やリラックス効果もある。xiāngshuǐ

(3) 中医薬を収納する貴重な箆筒

百草坊では実際に中医薬を収納していた非常に貴重な箆筒が展示されている。虫に強い材質で1,000種類以上ある。それぞれの箆筒にQRコードが付いており、薬の情報を見ることができる。

中国は薬膳文化の国で24節気に合わせて適した薬を調合してくれる。服薬だけでなく、料理に入れることも好まれる。 好吃！

(4) AIがリクエストに応えた「香り」を調合

中国では中医薬は「匂いで感じるもの」「嗅ぐだけでも体に良い」と考えられている。病は口や鼻から入るので、薬も同じ経路で投薬し、古くはお香で病を治していた。

風邪予防に効く香りの配合なども可能で、香りが肺に入って効果が発揮される。このコーナーでは例えば「疲労に効く香りは?」「二日酔いに効く香りは?」等、対話形式でリクエストするとAIがものの3秒ほどで、リクエストにあった香りを提案し、出してくれる。 原来如此



説明を受ける交流団一行

3 まとめ

「中医薬」とは、約 2700 年余り前から古代中国の伝統医学に扱われている薬の総称である。日本で言う「漢方薬」より「中医薬」の方が歴史が長く、使用する成分の数も多い。

日本でも抗生物質などの薬以外に漢方薬が重宝され服薬されているが、ルーツを辿ると聖徳太子の時代の遣隋使やその後の遣唐使が中国大陆に渡り、中国の文化や教育を学ぶ中で薬の知識も含む東洋医学も同時に習得し日本へ持ち帰った。

そうした意味において、中国は日本人の健康に大きく寄与している大恩ある隣国である。日中国交正常化から 50 年余が過ぎ、本県と浙江省との交流も

40 年以上の年月を重ねてきた今こそ、行政、民間レベルの交流をさらに活発に行い、友好な関係を強くして行きたいと考える。 謝謝。



施設入口にて